

## クライアントの体験過程様式の推定値とセラピストが認知した面接経過の関係について

その他のタイトル	The Relationship Between Estimated Client Experiencing and Therapists ' Perception of Therapy Progress
著者	大橋 梨乃, 池見 陽
雑誌名	Psychologist : 関西大学臨床心理専門職大学院紀要
巻	7
ページ	39-48
発行年	2017-03-18
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/11326">http://hdl.handle.net/10112/11326</a>

---

# クライアントの体験過程様式の推定値とセラピストが認知した 面接経過の関係について

## The Relationship Between Estimated Client Experiencing and Therapists' Perception of Therapy Progress

---

大橋梨乃 池見 陽

関西大学臨床心理専門職大学院

Rino OHASHI, Akira IKEMI

Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

### ◆要約◆

本研究では、クライアントの体験過程様式を測定するために、三宅（2007）が開発したEXPチェックリストを実際の臨床現場で用い、クライアントの体験過程様式の推定値とセラピストが認知した面接経過の関係性について調べることを目的とした。大学院附属心理相談機関において、セラピストが対話型心理療法を行っていたクライアントを対象にEXPチェックリストII ver.1.0とセラピストが面接経過をどのように認知しているか測定するために自作したJIK尺度を記入した。その結果、EXPチェックリストII ver.1.0とJIK尺度との間に相関がみられ、クライアントの体験過程様式が高い程、セラピストがそのクライアントとの面接経過を良好であると認知していることが示された。このことから、クライアントの体験過程様式が高い程、面接は順調に進行し、クライアントの状態が改善に向かうことが示唆された。また、本研究の協力者であるセラピストのオリエンテーションは様々であったにも関わらず、体験過程様式とJIK尺度との間に相関がみられた。すなわち、面接経過が順調に進んでいるか否かは、セラピストのオリエンテーションとは関係なく、クライアントの体験過程に触れる様式と関係していたと考察された。

キーワード：体験過程様式、体験過程スケール、EXPチェックリスト、面接経過の認知

### Abstract

The purpose of this study is to apply, in clinical settings, the EXP checklist developed by Miyake (2007), which estimates clients' levels of experiencing, and to examine the relationship between such levels and therapists' perception of progress in therapy. Therapists working at two university-affiliated psychotherapy centers filled in the EXP checklist and a JIK Scale that measures therapists' perception of progress in therapy. Results showed correlations between the JIK Scale and the EXP Checklist, indicating that higher client estimated-EXP was correlated with

higher perception of therapy progress. Thus, it was found that, with higher client EXP, more progress in therapy and improvements in clients' conditions could be expected. Moreover, despite the fact that therapists in this study came from various orientations, correlations were found between the JIK Scale and the EXP checklist, indicating that, regardless of therapy orientations, progress in therapy was related to clients' experiencing.

**Key Words:** Mode of Experiencing; The EXP Scale; EXP Checklist; Perception of Therapy Progress

## I. 問題と目的

体験過程様式（以下 EXP レベル）は、アメリカ合衆国の哲学者であり心理療法家の E. Gendlin の体験過程理論を元に心理療法において人が変化するとき、どのような話し方をしていくかに注目し、心理療法の効果を測ることができるように開発されたツールである。クライアントの EXP レベルの測定については、M.Klein, P. Mathieu, D. Kiesler, E.Gendlin が 1970 年に Wisconsin Psychiatric Institute で第三者評定尺度として体験過程尺度（The Experiencing Scale：以下 EXP スケール）を作成した。その後、アメリカ合衆国を中心として、EXP スケールのいくつかのバージョンや評定マニュアルなどが作成され、心理療法のアウトカムと関連する尺度として注目された。今日では、主に Emotion Focused Approach やフォーカシング指向心理療法の研究者たちによって、EXP スケールの研究が続けられている。日本では、池見・田村・吉良ら（1986）が 1970 年の初期 7 段階バージョンの日本語版 EXP スケールを公表し、その後、三宅・田村・池見（2006）によって 5 段階バージョンの EXP スケールが作成された（Table 1 参照）。

EXP スケールとは、クライアントの面接中の発言を評定するものである。EXP レベルの段階が低い程、出来事に関する語りが多く、気持ちの表現が少ないのが特徴であり、段階が高くなる程、気持ちに触れた語りが多く見られ、さらにその気持ちを自己吟味したりして、新たな意味を得るなどの変化が見られるのが特徴である。EXP スケールの評定では、前後のセラピストの

発言やクライアントの話の流れに影響を受けることがなく、クライアントの発言にのみ注目をする。より詳しい評定基準や EXP スケールの概要については、本誌の久保田・池見（2017）を参照されたい。

EXP スケールを用いた過去の研究には、D. Kiesler（1971）がクライアントの EXP レベルと心理療法のアウトカムの関連を検討したものがあり、この研究でセラピーが成功する人はそうでない人に比べてセラピーの初期段階から EXP レベルの段階が高く、その傾向はセラピーの全過程で継続されるという結果が報告されている。その後、M.Klein, P. Mathieu & D.Kiesler（1986）、M. Hendricks（2001）などによって研究のレビューがされている。日本では、田村（1994）、土井（2007）、三宅・松岡（2007）が臨床事例の過程を EXP スケールによって分析した研究や、池見（1998）が傾聴教育に EXP スケールによる評定練習を取り入れた例がある。また、M.Klein, P. Mathieu & D.Kiesler（1986）、吉良・田村・岩重ら（1992）はセラピストの EXP レベルを測定するためのセラピスト EXP スケールを開発している。しかし、2000 年以降、EXP スケールを用いた研究は国際的に減少傾向にあり（Krycka & Ikemi 2016）、その要因として、研究がある程度のまとまった成果をあげたために「研究され尽くされた感」があることや、逐語記録が不可欠な EXP スケール研究の手間や個人情報管理の問題もあるのではないかと推測される。そこで、三宅（2007）は面接録音や逐語記録などクライアントの個人情報に一切触れることなく、セラピストがクライアントとの面接を振り返って記入する EXP チェックリスト（以

Table 1 5段階および7段階 EXP スケール評定基準の概要 (三宅ら 2007)

	5段階	7段階	評定基準
出来事中心の段階	Very Low (VL)	1, 2	話し手は出来事を語る (自分に関係のない出来事、あるいは自己関与がある出来事) が、気持ちの表現はみられない。
	Low (L)	3	出来事を語る中に気持ちの表現があるが、気持ちは出来事への反応として語られている。
気持ち中心の段階	Middle (M)	4	出来事への反応としてではなく、自分のあり方を表明するように気持ちが語られている。豊かな気持ちの表現が見られるが、そこか気持ちを吟味したり、状況との関連付けなどを試みたりはしない。ら
	High (H)	5	気持ちを語りながら、その気持ちを自己吟味したり、仮設立てて気持ちを理解しようとしている。話し方には沈黙がみられることが多い。
創造過程の段階	Very High (VH)	6, 7	ひらめきを得たように、気持ちの側面が理解される。声が大きくなる、何かを確信しているような話し方に変化することがある。

下 EXPCK) を開発した。EXPCK は3分程度の短い時間で EXP レベルを推定することができるため、国際的に注目されたにも関わらず、日本語以外の言語では未だ作成されていない。また、EXPCK は三宅の開発研究以降、実際の臨床研究では用いられたことがなく、関西大学に眠っていたのが現状である。

そこで本研究では、EXPCK を実際の臨床現場で用いて、クライアントの EXP レベルの推定値とセラピストが認知した面接経過との間に相関があるか否かを調べることを目的とした。

## II. 方法

### (1) 研究協力者

大学院の附属心理相談機関において、セラピスト10名(男性6名、女性4名)が、対話型心理療法を行っていた高校生以上のクライアント41名を対象に JIK 尺度と EXP チェックリスト II ver.1.0 (以下 EXPCK II ver.1.0) を記入した。尚、セラピストのオリエンテーションは様々であった。

### (2) 使用した質問紙

#### ① EXP チェックリスト II ver.1.0 (Table 2 参照)

三宅 (2007) が開発した EXPCK を基に久保

田・池見 (2017) が作成したものである。クライアントの EXP レベルを推定するための質問17項目で構成され、「Very Low」(設問1~4)、「Low」(設問5~7)、「Middle」(設問8~11)、「High」(設問12~14)、「Very High」(設問15~17)を評価し、ピーク(最高)値を推定値として採用する。

#### ② JIK 尺度

セラピストが面接経過をどのように認知しているか測定するために自作したものである。教員・大学院生を対象に「経過の認知(良好、不良等)に関わる特徴」を聴取し、収集した質問10項目で構成される。「全くそう思わない」(1点)、「あまりそう思わない」(2点)、「どちらともいえない」(3点)、「だいたいそう思う」(4点)、「非常にそう思う」(5点)の5件法で回答し、合計値を算出する。逆転項目には、これとは逆の点数を付与した。項目内容は Table 3 に示す。

#### (3) 記入について

セラピストが担当している対話型心理療法の面接が終わった後に、そのクライアントとの面接を思い出しながら EXPCK II ver.1.0 と JIK 尺度をセラピストに記入してもらった。尚、各チェックリストは同一のクライアントについて、1

回のみ記入した。また、クライアントの主訴、年齢、面接回数等の情報を別紙に記入してもらった。

(4) 倫理的配慮

本研究は、関西大学大学院心理学研究科によって倫理審査を受け、2016年度第0040号として認定されている。

研究協力者のセラピストに対して、研究の趣旨、研究協力への自由意志の尊重、協力の拒否や撤回による不利益はないこと、収集したデー

タ及び結果は厳重に管理し研究の目的以外に使用しないこと、研究終了後速やかに消去すること等を書面と口頭で説明した。

EXPCK II ver.1.0およびJIK尺度は、協力者が自身についてではなく、クライアント及びクライアントとの関係の評価について記入するため、個人情報に触れることがない。さらに匿名性を厳重にするために、記入者氏名も記入しないように配慮した。

Table 2 EXP チェックリストII ver.1.0

EXPチェックリストII ver.1.0		
この面接でのクライアントのあり方について、設問項目に記述されているようなクライアントの話し方が観察された場合には、その項目の後ろにある口にチェック印を入れてください。全体的な印象を総合してどこか一つにチェックするのではなく、この面接で観察されたすべての体験の様式にチェックを入れてください。		
1 クライアントの話は、出来事や事実の説明に終始した。	<input type="checkbox"/>	1 Very Low 感情表現がない。出来事のみを語っている、あるいは知性化された様式。
2 クライアントの発言には感情表現が全く見られなかった。	<input type="checkbox"/>	
3 クライアントに気持ちを尋ねても、感情表現はでなかった。	<input type="checkbox"/>	
4 クライアントは「～と思う」「～と考えた」など知的に物事を整理して話していた。	<input type="checkbox"/>	
5 クライアントの話は事実や出来事に関するものだが、そのときの気持ちを尋ねると感情表現が見られた。	<input type="checkbox"/>	2 Low 感情表現は出来事への反応に限定されている。例、「〇〇と言われて腹が立った」。どんな腹立ちかなどの質は語られない。出来事が中心の語り。
6 クライアントは出来事や状況を語る中で喜怒哀楽をはっきり表明していた。	<input type="checkbox"/>	
7 クライアントが表現している気持ちは出来事への反応だ。	<input type="checkbox"/>	
8 クライアントは自分の気持ちをよく見つけ、自分の気持ちの表現を利用して自分のあり方を語っていた。	<input type="checkbox"/>	3 Middle 出来事ではなく、自分の在り方を表現するために豊富な感情表現を用いている。例、最近、ずっと重たい感じがして、疲れたような、沈んだような気分で…フェルトセンスが表現される場合もある。
9 クライアントは出来事や状況への一般的な反応のみならず、個性的な感じ方を伝えていた。	<input type="checkbox"/>	
10 クライアントは状況や出来事の描写を通して、自分自身の特徴を伝えようとしていた。	<input type="checkbox"/>	
11 クライアントの話にはフェルトセンスの表現がみられた。	<input type="checkbox"/>	
12 クライアントは自分の気持ちと一致する表現を探しながら語っていた。	<input type="checkbox"/>	4 High 自分の体験を表現する言葉を探していたり、「～かな」と仮説的に話している。
13 クライアントは「ああかな、こうかな」などと自分の気持ちを理解しようとしていた。	<input type="checkbox"/>	
14 クライアントはときどき沈黙して、自分の気持ちを見つめながら言葉を探していた。	<input type="checkbox"/>	
15 クライアントは話の途中で、ハッと何かに気がついたり、「あ、わかった」と言って閃いたりする場面があった。	<input type="checkbox"/>	5 Very High 閃き、体験の意味がわかる。例、「あ、わかった！」「そうだったんだ、そうそうそう…」
16 クライアントは何かを発見したようで、興奮気味になったり、声が大きくなったり、笑いだしたり、涙したり、驚いたりする場面があった。	<input type="checkbox"/>	
17 クライアントが次々と発見・洞察する場面があった。	<input type="checkbox"/>	

## (5) 分析方法

### ① 尺度間の関連性

クライアントの EXP レベルとセラピストの面接経過の認知の関連性を検討するために、EXP レベル（3段階 EXP スケールと 5段階 EXP スケール）と JIK 尺度の合計点および各質問項目について Spearman の順位相関係数（rs）を算出した。有意水準は  $p < 0.01$  とした。

### ② JIK 尺度の構成

JIK 尺度の因子的妥当性を調べるために、主因子法およびプロマックス回転による因子分析を行った。また、内的整合性を検討するために、得られた因子分析結果に対して Cronbach の  $\alpha$  信頼性係数を算出した。

## (2) JIK 尺度の因子分析結果

JIK 尺度の因子的妥当性を調べるために、主因子法およびプロマックス回転による因子分析を行った結果、2 因子が妥当であると考えられた。

第 1 因子は、JIK 尺度の設問 1（以下 J1 のように表記）「このクライアントとのセラピーは順調に進行している」や J2 「このクライアントとの面接には充実感を感じる」などの 7 項目から構成されており、「充実感や良好さの認知」尺度と命名した。第 2 因子は、J7 「このクライアントとの面接後に疲労を感じる事が多い」や J8 「このクライアントとの人間関係にはほどよい距離感がある」などの 3 項目から構成されており、項目内容に偏りがみられたため、因子名は「その他」と命名した。

信頼性係数を検討するために、Cronbach の  $\alpha$  信頼性係数を算出した結果、10 項目合計（尺度全体）の信頼係数は .775、第 1 因子「充実感や良好さの認知」では .853、第 2 因子「その他」では -.272 であった。10 項目合計および第 1 因子の信頼係数は十分な値であった。一方、第 2 因子の値には偏りがみられたが、これらの質問項目はセラピストの面接過程に対する認知を多面的に測定する上で不可欠なものであると考え

## Ⅲ. 結果

### (1) 対象者の背景

対象者 41 名（男性 13 名、女性 28 名）の平均年齢は 43 歳であった。平均面接実施回数は 21.1 回であった。クライアントの主訴は、家族関係、対人関係、職場での問題、情緒問題、身体症状、発達上の問題、自己の性格、学校生活上の問題、不安および焦燥感、意欲の喪失等であった。

Table 3 JIK 尺度の因子分析パターン

項目	I	II
第 I 因子「充実感や良好さの認知」 ( $\alpha = .853$ )		
3 このクライアントが求めているものと面接の実際はズレているように感じる (逆)	.821	-.367
1 このクライアントとのセラピーは順調に進行している	.772	.091
2 このクライアントとのセラピー経過に満足している	.735	.029
6 このクライアントとの面接には充実感を感じる	.719	.128
5 このクライアントとの面接は往々にしてアツという間に時がたつ	.661	-.207
9 このクライアントの状態は改善に向かっていると思う	.605	.093
4 このクライアントとのセラピー面接は居心地がいい	.416	.379
第 II 因子その他 ( $\alpha = -.272$ )		
7 このクライアントとの面接後に疲労を感じる事が多い (逆)	-.124	.543
10 このクライアントのセラピーにはキャンセルなどが多い (逆)	.135	-.444
8 このクライアントとの人間関係にはほどよい距離感がある	.290	.394
因子相関行列	1.000	.492
	.492	1.000

られたため、あえて除外せず、10項目すべてを分析対象とした。

### (3) EXPCK II ver.1.0 と JIK 尺度の関連性について

EXPCK II ver.1.0 の推定値を3段階 EXP スケールと5段階 EXP スケールの両方で算出し、JIK 尺度の合計値（以下 JSUM）との間に有意な相関があるか検討した。

分析の結果、3段階 EXP スケールの推定値（以下 3 EXP）と JSUM の間に有意な相関があった ( $rs=0.502, p<0.01$ )。また、5段階 EXP スケールの推定値（以下 5 EXP）と JSUM の間にも有意な相関があった ( $rs=0.481, p<0.01$ )。

3 EXP および 5 EXP と JIK 尺度の各質問項目間の関連性を調べた結果、3 EXP に対して、J6 「このクライアントとの面接には充実感を感じる」、J9 「このクライアントの状態は改善に向かっていていると思う」は有意な相関を示した ( $rs=0.536, 0.442, p<0.01$ )。5 EXP に対しては、J2 「このクライアントとのセラピー経過に満足している」、J6 「このクライアントとの面接には充実感を感じる」は有意な相関を示した ( $rs=0.415, 0.509, p<0.01$ )。

JSUM と EXPCK II ver.1.0 の各質問項目間の関連性を調べた結果、JSUM に対して、EXPCK II ver.1.0 の設問 8（以下 X8 のように表記）「クライアントは自分の気持ちをよく見つめ、自分の気持ちの表現を利用して自分のあり方を語っていた」、X9 「クライアントは出来事や状況への一般的な反応のみならず、個性的な感じ方を伝えていた」、X11 「クライアントの話にはフェルトセンスの表現が見られた」、X12 「クライアントは自分の気持ちと一致する表現を探しながら語っていた」、X14 「クライアントはときどき沈黙して、自分の気持ちを見つめながら言葉を探していた」は有意な相関を示した ( $rs=0.507, 0.425, 0.451, 0.463, 0.574, p<0.01$ )。

EXPCK II ver.1.0 および JIK 尺度の各質問項目間の関連性を調べた結果、X1 「クライアントの話は、出来事や事実の説明に終始した」に

対して、J5 「このクライアントとの面接は往々にしてアツという間に時がたつ」の間に有意な負の相関を示した ( $rs=0.445, p<0.01$ )。X2 「クライアントの発言には感情表現が全く見られなかった」では、J8 「このクライアントとの人間関係にはほどよい距離感がある」の間に有意な負の相関があった ( $rs=0., p<0.01$ )。X6 「クライアントは出来事や状況を語る中で喜怒哀楽をはっきり表明していた」では、J3 「このクライアントが求めているものと面接の実際はズレているように感じる」の逆転項目処理後との間に有意な相関があった ( $rs=0.400, p<0.01$ )。X8 「クライアントは自分の気持ちをよく見つめ、自分の気持ちの表現を利用して自分のあり方を語っていた」では、J1 「このクライアントとのセラピーは順調に進行している」、J6 「このクライアントとの面接には充実感を感じる」の間に有意な相関があった ( $rs=0.408, 0.418, p<0.01$ )。X10 「クライアントは状況や出来事の描写を通して、自分自身の特徴を伝えようとしていた」では、J2 「このクライアントとセラピー経過に満足している」、J6 「このクライアントとの面接には充実感を感じる」の間に有意な相関があった ( $rs=0.416, 0.489, p<0.01$ )。X12 「クライアントは自分の気持ちと一致する表現を探しながら語っていた」では、J6 「このクライアントとの面接には充実感を感じる」の間に有意な相関があった ( $rs=0.428, p<0.01$ )。X14 「クライアントはときどき沈黙して、自分の気持ちを見つめながら言葉を探していた」では、J1 「このクライアントとのセラピーは順調に進行している」、J2 「このクライアントとのセラピー経過に満足している」、J6 「このクライアントとの面接には充実感を感じる」、J9 「このクライアントの状態は改善に向かっていていると思う」の間に有意な相関を示した ( $rs=0.457, 0.511, 0.490, 0.441, p<0.01$ )。

Table 4 EXP レベルと JIK 尺度間の相関係数

			3 EXP	5 EXP	JSUM
Spearman の 順位相関係数	3 EXP	相関係数 (rs)	1.000	.904	.502
		有意確率 (両側)	0	0	0.001
		度数	41	41	41
	5 EXP	相関係数 (rs)	.904	1.000	.481
		有意確率 (両側)	0	0	0.001
		度数	41	41	41
JSUM	相関係数 (rs)	.502	.481	1.000	
	有意確率 (両側)	0.001	0.001	0	
	度数	41	41	41	

#### IV. 考察

##### (1) JIK 尺度の構成について

JIK 尺度の因子分析により、①充実感や良好さの認知、②その他の2因子が抽出された。①充実感や良好さの認知に関する因子は、面接経過に対する良好さの認知に関して安定性の高い因子と考えられる。一方、②その他に関する因子は、構成されている項目内容に偏りがみられ、面接経過に対する良好さの認知に関しても安定性の低い因子と考えられる。J7「このクライアントとの面接後に疲労を感じる事が多い」については、疲労感を肯定的もしくは否定的に捉えるかによって大きな偏りが生じる可能性があったと考えられる。J8「このクライアントとの人間関係にはほどよい距離感がある」についても、ほどよい距離感とはどのような状態を表す表現であるのかが曖昧であり、個人間で捉え方に偏りが生じる可能性があったと考えられる。J10「このクライアントのセラピーにはキャンセルなどが多い」については、クライアントの仕事の都合や子どもの体調不調によるキャンセルの可能性が考慮できるため、面接経過に対する良好さの認知を測定する質問項目として適切ではなかったと考えられる。

今回使用した JIK 尺度において EXP レベルとの高い相関が示された。しかし、面接経過に対する良好さの認知に関して、安定性の低かった②その他に関する因子で構成される質問項目を除外した尺度を使用した場合、EXP レベルと

面接経過に対する良好さの認知との間により高い相関を示すのではないかと考えられる。

##### (2) EXPCK II ver.1.0 と JIK 尺度の関連性について

クライアントの EXP レベルとセラピストの面接経過の認知との間に関連がみられ、クライアントの EXP レベルが高い程、セラピストがそのクライアントとの面接経過を良好であると認知していることが示唆された。面接中、自分の気持ちに触れ、その気持ちを自己吟味しているクライアントは面接が良好に進んでいる一方、気持ちに触れる表現が少ないクライアントは面接経過が不良であると考えられる。

クライアントの EXP レベルと面接経過の良好さとの間の関連性について、3 EXP に対しては、J6「このクライアントとの面接には充実感を感じる」および J9「このクライアントの状態は改善に向かっていると思う」が有意な相関を示した。5 EXP に対しては、J2「このクライアントとのセラピー経過に満足している」、J6「このクライアントとの面接には充実感を感じる」は有意な相関を示した。これらの結果から、クライアントの EXP レベルが高い程、セラピストはクライアントとの面接に充実感を感じていると考えられる。さらに 3 EXP の結果から、クライアントの EXP レベルが高い程、クライアントの状態が改善に向かっているとセラピストが認知していることが示唆された。

セラピストが良好な面接経過であると認知するクライアントの体験様式について、X8「ク



クライアントは自分の気持ちをよく見つめ、自分の気持ちの表現を利用して自分のあり方を語っていた」、X9「クライアントは出来事や状況への一般的な反応のみならず、個性的な感じ方を伝えていた」、X11「クライアントの話にはフェルトセンスの表現が見られた」、X12「クライアントは自分の気持ちと一致する表現を探しながら語っていた」、X14「クライアントはときどき沈黙して、自分の気持ちを見つめながら言葉を探していた」が有意な相関を示した。これらの結果から、セラピストはクライアントのEXPレベルがMiddle およびHigh といった比較的高い段階で、面接経過を良好であると認知している可能性が示唆された。つまり、出来事や状況への一般的な反応のみならず、自分の気持ちをよく見つめながら自分の感じ方やあり方を伝えたり、表現する言葉を探したりするクライアントは面接が良好に進んでいる傾向があると考えられる。

クライアントの体験様式とセラピストの面接経過の認知との間の関連性について、X1「クライアントの話は、出来事や事実の説明に終始した」がJ5「このクライアントとの面接は往々にしてアツという間に時がたつ」と有意な負の相関を示し、X2「クライアントの発言には感情表現が全く見られなかった」では、J8「このクライアントとの人間関係にはほどよい距離感がある」と有意な負の相関を示した。これらの結果から、クライアントのEXPレベルがVery Low のような低い段階で、面接中の発言に感情表現がみられず、出来事のみを語っている場合、セラピストはクライアントとの面接時間の経過を遅いと感じる傾向があり、クライアントとの間にほどよいと感じる距離感が保たれていない可能性が考えられる。X6「クライアントは出来事や状況を語る中で喜怒哀楽をはっきり表明していた」では、J3「このクライアントが求めているものと面接の実際はズレているように感じる」の逆転項目処理後で有意な相関を示し、クライアントのEXPレベルがMiddleの段階で、

発言に感情表現がみられるようになると、セラピストはクライアントの目標達成に向けて面接が進んでいると認知するようになるということが示唆された。X8「クライアントは自分の気持ちをよく見つめ、自分の気持ちの表現を利用して自分のあり方を語っていた」では、J1「このクライアントとのセラピーは順調に進行している」およびJ6「このクライアントとの面接には充実感を感じる」と有意な相関を示した。X10「クライアントは状況や出来事の描写を通して、自分自身の特徴を伝えようとしていた」では、J2「このクライアントとのセラピー経過に満足している」およびJ6「このクライアントとの面接には充実感を感じる」と有意な相関を示した。これらの結果から、クライアントのEXPレベルがHighの段階で、クライアントの発言が出来事中心の語りではなく、自分のあり方や特徴を表現するものになると、セラピストはクライアントとの面接経過に充実感や満足感を感じ、面接が良好に進んでいると認知するようになると考えられる。X12「クライアントは自分の気持ちと一致する表現を探しながら語っていた」では、J6「このクライアントとの面接には充実感を感じる」と有意な相関を示し、X14「クライアントはときどき沈黙して、自分の気持ちを見つめながら言葉を探していた」では、J1「このクライアントとのセラピーは順調に進行している」、J2「このクライアントとのセラピー経過に満足している」、J6「このクライアントとの面接には充実感を感じる」、J9「このクライアントの状態は改善に向かっていると思う」と有意な相関を示した。これらの結果から、クライアントのEXPレベルがVery Highの段階で、面接中にクライアントが自分の気持ちや体験を表現する言葉を探しながら語っていると、セラピストはクライアントとの面接経過により充実感を感じるようになることが示唆された。また、クライアントの体験様式がこのような高い段階になると、セラピストはクライアントとの面接経過を良好であると認知し、クライエン

トの状態が改善に向かっていると実感できるようになると考えられる。つまり、クライアントのEXPレベルが高い程、面接は順調に進行し、クライアントの状態が改善に向かうことが示唆された。

今回の研究で興味深いのは、セラピストのオリエンテーションとは関係なく、EXPCK II ver.1.0 と JIK 尺度が相関していたことである。すなわち、面接経過が順調に進んでいるか否かは、セラピストのオリエンテーションに関係なく、クライアントの体験過程に触れる様式と関係していたと考えられる。この点については今後さらに細かい検討が必要であろう。

## 付 記

本研究は、関西大学大学院心理学研究科によって倫理審査を受け、2016年度第0040号として認定されている。本論文を執筆するにあたり、調査にご協力いただきました関西大学心理臨床センターの相談員の皆様、この場を借りて御礼申し上げます。また、ご助言とご指導を賜りました関西大学大学院博士課程後期課程の川崎俊博さん、関西大学臨床心理専門職大学院池見プラクティカルの久保田恵実さん、崔チャンさん、根本真理子さん、山形碧子さんのご協力に御礼申し上げます。

## 文 献

- 土井晶子 (2007)：フォーカシング指向心理療法における「体験的傾聴」の特質と意義—語りに「実感」が伴わないクライアントとの面接過程から— 『人間性心理学研究』 24(1)：11-22.
- Hendricks, M. N. (2001): Focusing-oriented/experiential psychotherapy. In D. J. Cain, & J. Seeman (Eds.), *Humanistic psychotherapy: Handbook of research and practice*. Washington, DC: American Psychological Association: 221-251.
- 池見陽 (1998)：産業メンタルヘルスと傾聴教育 『産業精神保健』 6(4)：245-248.
- 池見陽 (2016)：『傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング 感じる・話す・聴くの基本』 ナカニシヤ出版.
- 池見陽・田村隆一・吉良安之・弓場七重・村山正治 (1986)：体験過程とその評定：EXP スケール評定マニュアル作成の試み 『人間性心理学研究』 4: 50-64.
- Kiesler, D. J. (1971): Patient experiencing and successful outcome in the individual psychotherapy of

- schizophrenics and psychoneurotics. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 37: 370-385.
- 吉良安之・田村隆一・岩重七重・大石英史・村山正治 (1992)：体験過程レベルの変化に影響を及ぼすセラピストの応答—ロジャースのグロリアとの面接の分析から— 『人間性心理学研究』 10(1)：77-90.
- Klein, M. H., Mathieu-Coughlan, P. L. & Kiesler, D. J. (1986): The experiencing scale. In L. Greenberg, & W. Pinsof (Eds.), *The psychotherapeutic process: A research handbook*. New York: Guilford Press: 21-71.
- Krycka, K., & Ikemi, A. (2016): Focusing-oriented-experiential psychotherapy: From research to practice. In D. Cain, K. Keenan, & S. Rubin (Eds.), *Humanistic psychotherapies: Handbook of research and practice* (2<sup>nd</sup> ed.). Washington, DC: American Psychological Association pp. 251-282.
- 久保田恵実・池見陽 (2017)：体験過程様式の推定に関する研究：EXP チェックリスト 11 ver.1.1 作成の試み『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』 7：(印刷中)
- 三宅麻希・田村隆一・池見陽 (2006)：5段階体験過程スケール作成の試み—評定基準と評定例— 『ヒューマンサイエンス』 (9)：31-38.
- 三宅麻希 (2007)：カウンセリング導入と体験過程様式についての一考察—フォーカシングを中心としたトリアルカウンセリングセッションを用いて— 『産業カウンセリング研究』 9(1)：39-46.
- 三宅麻希・松岡成行 (2007)：セラピスト・フォーカシングにおけるケース理解の体験過程様式：対人援助職とのフォーカシング・パートナーシップの1セッションからの考察 文学部心理学論集, 1, 59-71.
- 三宅麻希・田村隆一・池見陽 (2007)：5段階体験過程スケール評定マニュアル作成の試み 『人間性心理学研究』 25(2)：193-205.
- 田村隆一 (1994)：体験過程レベルと治療関係—EXP スケールによる事例の分析と考察 『福岡大学人文論』 26(2)：391-402.